

143.

612.467.3

膀胱ノ「トーマス」ト其ノ神經支配

(第2編)

下腹神經叢及ビ膀胱神經叢摘出ニ依ル

「膀胱トーマス」ノ變化

岡山醫科大學生理學教室(主任生沼教授)

研究科學生 醫學士 佐藤直泰

[昭和15年7月29日受稿]

第1章 緒言

既ニ本論文第1編ニ於テ述ベタルトコロナルガ、余ハ「膀胱トーマス」ノ脱落症狀ノ原因ニ就テ探求セント欲シ、特ニ我々ガ下腹部乃至ハ骨盤腔内ノ臟器ニ對シ外科的手術ヲ施シタル際ニ、高度ノ尿閉又ハ尿潴溜現象ヲ惹起シ、之ガ時日ノ經過ト共ニ次第ニ恢復シテ來ル場合ニ往々遭遇スル事ガアルモノナルガ、余ハコノ尿潴溜ガ如何ニシテ起リ又如何ナル經過ヲトリテ恢復スルカヲ、犬ヲ用ヒテ實驗的ニ研究スルニアリタルナリ。而シテ第1編ニ於テ余ハ其ノ第1手段トシテ膀胱内壓ヲ測定スル裝置ヲ考案シ、然ル後兩側ノ骨盤神經又ハ下腹神經ヲ切斷シ依テ生ズル「膀胱トーマス」ノ變化位ニ其ノ恢復ノ狀態ニ就テ探究シ、夫等ノ成績ニ就テ稍々詳細ニ論述シタリ。即チ骨盤神經ヲ切斷スル時ニハ、手術後約2日間ハ膀胱排尿筋ノ「トーマス」ハ著シク弛緩シテ、其ノタメニ流入シ得ル液量ハ健康時ノ2倍ニ近キモ、第3日目頃ヨリハ略ボ術前ノ狀態ニ恢復ス。但シ膀胱内壓ノ上昇ハ極メテ低クコノ狀態ヲ可成リ長ク持續ス。又術後必ズ尿閉ヲ起スモノアレドモ之モ第3日目頃ヨリ自發的ニ排尿ヲ營ミ得ル様ニナル事ナドヲ認メ得タリ。次ニ下腹神經ヲ切斷スル時ニハ、入レ得ル液量ハ著シク減退シ、即チ「トーマス」ハ著

明ニ上昇スルモ之モ骨盤神經同様第3日目頃ヨリハ術前ノ値ニ恢復ス。膀胱内壓ノ變化及ビ上昇ノ極大値ハ手術前ト不變ニシテ、而モコノ場合ニハ尿潴溜ヲ來ス事ナキヲ認メ得タリ。以上ノ成績ヨリシテコノ2ツノ神經ハ切斷直後ハ「膀胱トーマス」ニ大ナル變化ヲ來サシメルモノナレドモ、僅カ2,3日ニシテ其ノ「トーマス」ハ不完全作ヲモ略ボ元ノ値ニ恢復スル事ヨリ考ヘテ、之等神經ノ切斷端ヨリモ末梢ニ於テ新ラシク「トーマス」調節ノ中樞ガ新生サレルモノナラン事ヲ第1編ノ結論トナシタリ。而シテ本第2編ニ於テハ、然ラベ其ノ新生サレタル神經中樞ハ果シテ何處ナリヤトノ問題ニ就テ論述セントスルモノナリ。周知ノ如ク、骨盤内臟ノ外科的手術ノ後ニ來ル排尿障礙ハ極メテ頑固且執拗ナルモノニシテ、數多ノ合併症ヲ誘發スル事アリ、コノ治療法ハ甚ダ困難ナルモノアリテ、コノ本實驗的研究ガ多少其ノ間ノ事情ヲ明カニシ、コノ對策ニ就テ聊カノ貢獻スルトコロアラバ余ノ幸甚トスルモノナリ。

第2章 實驗方法、其ノ他ノ注意事項ニ就テ

實驗動物ハ第1編ニ於ケルト同ジク中型ノ雌犬ヲ用ヒタリ。而シテ犬ニ於テ膀胱ニ分布スル神

經ノ解剖的關係ニ就テハ既ニ第1編ニ於テ詳細ニ述ベタルヲ以テ、本編ニ於テハ重複ヲ避ケテ記述ヲ省略ス。本編ニテハ第1ニ骨盤神經及ビ下腹神經ヲ同時ニ切斷シタル場合ノ「膀胱トーヌス」ノ變化、第2ニ下腹神經叢、膀胱神經叢ヲ摘出シタル場合ノ「膀胱トーヌス」ノ變化ノ2ツノ場合ニ就テ論ゼントスルモノナルガ、夫等ノ手術方法ハ第1編ニ於テ述ベタル所ト殆ド全く同様ナル故ニ、手術方法ニ就テモ本編ニテハ記述ヲ省略ス。又「膀胱トーヌス」ノ測定方法モ前第1編ト同一ナル故、コノ度ハ論述セズ。唯コノ實際ニ上注意スベキ、2, 3ノ事項ニ就テノミ記述セントス。其ノ第1ハ前第1編ニ於テモ一寸述ベタル所ナルガ、余ノ行ヒタルガ如キ方法ニテ「膀胱トーヌス」ヲ測定スル場合ニハ「金屬カテーテル」ヲ毎日尿道ヨリ膀胱ヘ挿入スルノ必要アリ。コノ時如何ニ嚴重ニ無菌的ニ行ヒテモ必ず膀胱ノ「カタル」症狀ヲ惹起シ、其ノタメニ膀胱ニ容レ得ル液量ガ減少シ、實驗ノ成績ヲ不確定ナラシムル事ナリ。故ニ第1編ニ於テ述ベタルガ如ク、「カタル」症狀ガ略ボ治癒シテ後ニ本格的ノ實驗ヲ始メルノ必要ガアリタル事。之ガ第1ノ注意事項ナリ。其ノ第2ハ、實驗成績ノ項ニ於テ述ブル所ナルガ、下腹及ビ骨盤兩神經叢ヲ摘出シタル手術例ニ於テハ常ニ強度ノ「膀胱カタル」ト同時ニ血尿ヲ起シ、時日ノ經過ト共ニ漸次恢復シ來ルヲ常トナセリ。余ハコノ手術ヲ數匹ノ犬ニ就テ行ヒタルガ何レモ高度ノ血尿ヲ惹起セリ。ソレ故後ニハ手術ノ際ニコノ事ヲ考慮ニ入レテ如何ニモ慎重ニ手術ヲ行ヒタルガ、ソレニモ拘ラズ高度ノ血尿ヲ生ジタルモノ故、何か異議ノアル事カトモ考ヘラルトコロナルガ、余ニハ解釋ガツキカネタル點ナリ。又1, 2ノ例デハ其ノタメニ死ノ轉歸ヲトリタル場合モアリ、其ノ剖檢の所見ハ膀胱内ニ高度ノ「カタル性」炎症ヲ呈シ、屢々大ナル潰瘍ヲ認メ得ルヲ常トセリ。カタル高度ノ炎症ヲ呈スル故、余ノ行ヒタル實驗方法ニヨリ「トーヌス」ヲ測定スルモ液ヲ少シシカ容レ得ズ。而

モ高度ノ尿潴溜ヲ來セルニモ拘ラズ液ハ少量シカ容レ得ザル事多カリキ。其ノタメニ實驗成績ヲ甚ダ不確定ナラシメタリ。故ニ神經叢摘出後ノ「トーヌス」測定表ハ稍々不確實ノ嫌ヒナキニ非ズ。寧ロ潴溜セル尿量ノ如何ニ依リテノミ「トーヌス」ノ狀況ヲ知り得タル場合ガ多カリキコトナリ。以下實驗成績ヲ掲載スルニ當リ、コノ2ツノ注意事項ヲ念ノタメ記シ置クモノナリ。

第3章 實驗成績

第1節 骨盤神經及ビ下腹神經同時切斷ニヨル「膀胱トーヌス」ノ變化

(第1例) 體重 6.5 kg ノ雌犬。

昭和13年12月7日、10日及ビ12日ノ3日間ニ互リテ觀察シタル健康時ニ於ケル「トーヌス」測定狀況ヲ、第1表、第2表及ビ第3表ニ記サン。

第 1 表

昭和13年12月7日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0	61	15
1-2	-1.1-0-	47	25
2-3	"	31	33
3-4	-1.0-0-	32	39
4-5	-1.6-0-	32	45
5-6	-2.1-0-	18	50
6-7	-1.6-0-	23	55
7-8	"	18	58
8-9	-2.6-	10	63
9-10	-1.6-2.1-0-	18	68
10-11	"	18	70
11-12	-1.6-	5	72
12-13	"	6	74
13-14	-1.1-	15	80
14-15	-3.1-	2	"
15-16	-6.0-	6	"
16-17	"	10	90
17-18	"	0	"
18-19	-6.5-	0	"
19-20	-6.5-	0	"
20-21	-3.2-9.5-	0	"

第 2 表
昭和 13 年 12 月 10 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0	61	15
1-2	-1.0-0-1.5-	46	23
2-3	-1.3-1.7-0-	45	32
3-4	-1.7-1.5-	32	40
4-5	-0.5-0-	35	50
5-6	"	31	55
6-7	-0-0.5-2.3-	28	60
7-8	-0.5-0-2.0-	15	62
8-9	-3.7-1.9-0-	12	65
9-10	-1.5-3.0-	15	69
10-11	-3.0-1.5-3.5-	15	72
11-12	-1.9-0-	11	75
12-13	-3.0-0-	18	80
13-14	-2.9-1.9-1.0-	6	"
14-16	-2.0-1.5-3.7-	10	82
16-18	-2.0-2.5-	21	86
18-20	-1.5-2.0-2.5-3.0-3.5-	8	88
20-22	-3.5-2.5-3.5-4.5-	12	90
22-24	-3.8-1.0-1.5-	8	92
24-26	-1.5-2.5-0.9-	5	94
26-28	-1.0-1.9-1.5-2.5-3.0-	13	98
28-30	-1.3-3.0-12.7-	0	"

第 3 表
昭和 13 年 12 月 12 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-1.2-	61	15
1-2	-1.0-0-1.5-	46	23
2-3	-1.3-1.7-0-	45	32
3-4	-1.7-1.5-	32	40
4-5	-0.5-0-	35	55
5-6	-1.5-0-	31	60
6-7	-0-0.5-2.3-	28	65
7-8	-0.5-0-2.0-	15	67
8-9	-3.7-1.9-0-	12	72
9-10	-1.5-3.0-	15	74
10-11	-3.0-1.5-3.5-	15	77
11-12	-1.9-0-	11	80
12-13	-3.0-0-	18	85
13-14	-2.9-1.9-1.0-	6	"
14-16	-2.0-2.5-3.7-	10	87

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
16-18	-2.0-1.5-0-	21	91
18-20	-1.5-2.0-2.5-3.0-3.5-	8	93
20-22	-3.5-2.5-1.0-0-1.5-	12	95
22-24	-3.8-2.5-3.5-4.5-	8	"
24-26	-1.5-2.5-0.9-	5	96
26-28	-1.0-1.9-1.5-2.5-3.0-	13	100
28-30	-1.3-3.0-12.7-	2	102

以上ノ3表ニ示スガ如ク、コノ動物ハ90cc、98cc及ビ102ccヲ膀胱ニ容レ得タリ。之ニ依リテ見ルニコノ動物ハ先ヅ100cc内外ノ液ヲ膀胱ニ容レ得ル事ヲ知ル。コノ犬ニ12月14日型ノ如ク開腹手術ヲ行ヒ、兩側ノ骨盤神經及ビ下腹神經ノ切斷ヲ施シタリ。翌15日「トーマス」ノ測定狀況ヲ第4表ニ掲載セン。

第 4 表
昭和 13 年 12 月 15 日 (手術後1日目)
膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 85 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0	142	50
1-2	0	96	75
2-3	-1.5-0-	68	90
3-4	"	44	105
4-5	"	17	103
5-6	-3.0-0-	19	107
6-7	-3.5-0-	17	112
7-8	-1.5-0-	31	118
8-9	-4.0-2.0-0-	11	120
9-10	-2.5-0-	15	125
10-12	-2.0-0-	20	127
12-14	-3.5-0-	10	130
14-16	-3.5-	7	133
16-18	-2.5-	3	"
18-20	-5.5-3.0-	9	135
20-22	-5.0-4.5-	0	"
22-24	-3.5-5.0-	1	"
24-26	-6.5-7.5-8.5-	2	"
26-28	-3.5-4.5-	1	"
28-30	-4.5-4.7-5.5-	0	"
30-32	-4.5-	0	"

昨日手術ノ時以來翌15日午前迄滿一晝夜ノ間

尿排泄無し、「トーマス」測定ノ際「カテーテル」ヲ通ジ排尿セシムルニ、85 ccノ尿ヲ得タリ。尙ホコノ際ノ尿ハ輕ク白色ニ濁濁セリ。恐ラク手術ニヨル装作ノタメ輕度ノ「膀胱カタル」ヲ起シタルモノナランカト思ハル。其ノタメカ容レ得ル液量ハ135 ccニシテ、サマデ大量ヲ容レ得ザリキ。サレド膀胱内壓ハ手術前ニ於ケル程高マラザルヲ認メ得ラル。尙ホ當日午後6時膀胱尿ヲ排泄セシムルタメ、「カテーテル」ヲ通ジ排尿セシメ約35 ccヲ得タリ。

手術後2日目(12月16日)ニハ「膀胱トーマス」ノ状態ハ第5表ノ如シ。

第 5 表

昭和13年12月16日(手術後2日目)

膀胱=溜ツテ居タ尿量 10.5cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0-0.3-	66	18
1-2	"	36	30
2-3	"	37	35
3-4	-0.6-0.3-0-	40	45
4-5	-1.3-0-	61	58
5-7	-0-0.3-	45	68
7-9	-2.3-1.1-	49	80
9-12	-0.6-1.3-0.3-0-	33	90
12-15	-1.3-0.7-0-	19	92
15-18	-1.3-0.3-	28	99
18-21	-2.3-1.8-2.8-	18	101
21-24	-2.3-1.3-	11	104
24-27	-2.3-2.9-2.3-	4	107
27-30	-4.8-3.8-	12	112
30-33	-2.3-2.8-	0	"

昨15日晚ヨリ本16日午後「トーマス」測定ノ時マデ自發的排尿ナシ。測定ノ時「カテーテル」尿105 ccヲ得タリ。尿ハヤハリ多少濁濁ノ傾向アリ。其ノタメカ當日ハ112 ccシカ容レ得ザリキ。サレド膀胱内壓ノ上昇ハ極ク僅カナリ。尙ホコノ測定時ヨリ午後7時迄ニハ自發的排尿ナカリシガ、翌17日即チ手術後3日目ノ早朝ニハ既ニ自發的排尿65 ccヲ見、又コノ日ノ早朝ヨリ晝ノ「トーマス」

測定時迄ニ又モヤ自發的排尿18 ccヲ見タリ。17日ノ「トーマス」測定時ノ残尿ハ僅カ37 ccニシテ、其ノ時ノ測定表ハ即チ第6表ニ掲グルガ如シ。

第 6 表

昭和13年12月17日(手術後3日目)

膀胱=溜ツテ居タ尿量 37 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.5-0.8-	85	35
1-2	-0-1.3-0.3-	34	45
2-3	-0.3-0.5-2.1-	28	50
3-4	-1.5-0.3-1.2-	17	54
4-5	-1.0-1.7-1.5-0.3-	17	57
5-6	-1.0-0.3-	17	60
6-7	-1.5-1.0-	13	63
7-8	-0.8-0.3-	16	65
8-9	-0.7-1.1-0.3-	9	66
9-10	-1.9-2.5-1.0-	6	67
10-12	-1.5-3.2-3.5-	10	70
12-14	-2.4-2.0-	0	"
14-16	-1.5-1.7-4.0-2.4-	10	73
16-18	-1.5-2.5-3.5-0.3-4.5-	5	75
18-20	-1.0-	0	"

或ハ「膀胱カタル」ノ未ダ治癒セザルタメカ、容レ得タル液量ハ75 ccニシテ甚ダシク減少ヲ示セリ。

尙ホ本日早朝ヨリハ自發的ニ排尿シ得ル様ニナリタルガ、之ハ眞ニ注目スベキ事ト云フベシ。次ニ手術後5日目即チ12月19日ノ「トーマス」測定表ヲ第7表ニ示サン。

第 7 表

昭和13年12月19日(手術後5日目)

膀胱=溜ツテ居タ尿量 35 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.2-	54	15
1-2	-2.0-0.5-	19	20
2-3	-0-0.5-	84	45
3-4	-2.5-0-2.2-	32	51
4-5	-1.5-	38	60
5-6	-0-1.0-	28	69

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
6—7	—0—1.0—	39	79
7—8	—1.4—1.5—0—	21	83
8—9	—1.2—1.0—0—	31	91
9—10	—0—0.3—	27	97
10—12	—0.5—0—1.0—1.2—	24	102
12—14	—0—0.5—1.2—	13	103
14—16	—0—1.0—2.0—2.2—0.5—	2	〃
16—18	—0—1.0—2.0—2.5—	0	〃
18—20	—0—1.0—2.5—1.2—	3	〃
20—22	—1.8—2.5—4.3—	2	〃
22—24	—3.0—	0	〃

コノ時ノ瀦留尿量35cc, 容レ得タル液量ハ103ccナリ。尙ホコノ際ノ「カテテル尿」モ多少瀦留シテ輕度ノ「膀胱カタル」ノ存スルコトヲ示セリ。

コノ實驗例ハ手術後ニ於テ「膀胱カタル」ヲ惹起シタルタメ、精確ナル「トーマス」測定ヲ行フヲ得ザリシハ甚ダ遺憾トストコロナリ。手術後ハ容レ得ル液量ハ健康時ヨリ少シク増加セルヲ認メタルガ、勿論前編ニ於テ述ベタル所ノ骨盤神經切斷ノ際ノ如クニ著明ニ「トーマス」ガ弛緩シテ多量ノ液ヲ容レ得タルニ比スレバ、甚ダ僅少ノ量ノ増加ニシテ之ガ果シテ同時ニ切斷シタル下腹神經ノ脱落症狀ガ合併シタルタメカ、或ハ「膀胱カタル」ニ依リテカカル結果ヲ生ジタルカ、其ノ鑑別ハ困難ナリ。但シコノ手術例ニ於テモ尿瀦留現象ハ明カニ表ハレ、而モ手術後2日間繼續シ、其ノ後ハ不完全乍ラモ自覺的排尿ヲ行フヲ得ルヲ見タルハ特記スベキ事ト云フベシ。

第2節 膀胱神經叢及ビ下腹神經叢摘出ニ依ル「膀胱トーマス」ノ變化

骨盤神經或ハ下腹神經ヲ切斷スレバ、直後1, 2日ハ甚ダシキ「膀胱トーマス」ノ脱落症狀ヲ來スモ、3日目頃ヨリハ早クモ不完全乍ラモ「トーマス」ノ恢復アリテ自發的排尿ヲナシ得ルニ到ル事ハ既ニ余ノ論シタルトコロ、又コノ兩神經ヲ同時ニ切斷スレバ、直後1, 2日ハ著明ノ尿閉ヲ來スモ既ニ3日目ヨリハ尿閉現象ナク自發的排尿ヲ行ヒ

得ルニ到ル事ハ實前驗ニヨリテ余ガ明カニシタルトコロナリ。即チ膀胱「トーマス」ヲ主宰スル之等2ツノ神經ヲ切斷スルモ、斯ノ如キ速カナル「トーマス」ノ恢復ハ、切斷部ヨリ末梢ニ於テ「トーマス」調節ノ中樞ガ新生サルル事ヲ考ヘザルベカラザル所以ナリ。故ニ余ハ次ニ、コノ新生サルル中樞ガ下腹乃至膀胱神經叢ニ存スルニハ非ズヤトノ想像ノ下ニ、然ラバ之等ノ神經叢ヲ摘出スレバ「膀胱トーマス」ニ如何ナル變化ガ起ルモノナリヤトノ問題ニ就キ探求セントシタリ。余ハ數匹ノ犬ヲ用ヒテコノ實驗ヲ行ヒタルガ、既ニ述ベタルガ如クコノ手術後ニハ何レモ出血性ノ「膀胱カタル」ヲ起シ、中ニハ其ノタメニ遂ニハ死亡シタル例スラアリ。之等ノ實驗例ノ内先ヅ典型ナル經過ヲトリタリト思ハルモノ4例ニ就キ以下記述セントス。

(第1例) 體重9.5kgノ雌犬。

1月31日, 2月1日, 2月7日及ビ2月10日ノ4回ニ互ル健康時ノ「膀胱トーマス」測定表ヲ第8表, 第9表, 第10表及ビ第11表ニ示ス。

第 8 表
昭和14年1月31日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0—1	—0—0.2—	148	48
1—2	—0.2—0.3—	86	65
2—3	—0.3—0.4—	81	85
3—4	—0.4—	56	100
4—5	—0.4—	48	110
5—6	—0.4—0.5—	47	120
6—7	〃	26	123
7—8	〃	29	130
8—9	〃	35	137
9—10	〃	28	142
10—12	—0.4—3.3—5.0—3.0—	33	150
12—14	—0.4—4.5—2.3—0.9—7.8—	21	153
14—16	—0.4—4.5—7.1—10.0—4.3—	37	160
16—18	—0.4—11.0—5.3—5.5—2.5—	21	163
18—20	—7.5—3.8—8.0—15.0—	8	165
20—22	—17.8—20.0—	0	〃

第 9 表
昭和 14 年 2 月 1 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.2-	197	100
1-2	-0.2-0.4-0.5-	132	145
2-3	-0.7-0.9-	59	160
3-4	-0.9-1.0-1.3-	30	167
4-5	-0.9-1.0-1.1-1.3-	23	170
5-6	-0.9-1.0-1.1-	20	175
6-7	-0.9-1.3-	15	182
7-8	-0.8-2.0-3.5-4.0-	18	186
8-9	-0.9-1.0-2.0-	11	190
9-10	-0.9-	29	195
10-12	-0.9-1.2-4.0-3.0-2.5-	12	200
12-14	-2.0-0.9-3.5-2.0-13.3-19.0-	17	207
14-16	-16.0-23.0-	0	"

第 10 表
昭和 14 年 2 月 7 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-2.5-2.0-	95	25
1-2	-0-1.5-3.5-	65	40
2-3	-0-2.0-3.0-5.0-	62	53
3-4	-0.3-2.8-4.5-	89	74
4-5	-0.3-1.0-2.5-	79	97
5-6	-0.3-3.0-	54	107
6-7	-0.3-1.5-2.0-	50	114
7-8	-0.3-1.0-	50	122
8-9	-0.3-2.0-3.7-1.3-	40	127
9-10	-0.3-2.5-3.5-	40	132
10-12	-0.3-1.5-2.5-3.0-	40	137
12-14	-0.3-2.0-4.5-6.5-3.0-	53	147
14-16	-0.4-1.5-3.8-6.0-	59	157
16-18	-0.4-3.5-3.9-4.8-2.5-	29	160
18-20	-0.4-3.5-6.5-	46	167
20-22	-5.5-2.5-0.4-3.0-14.5-	28	171
22-24	-0.4-3.5-3.0-	42	177
24-26	-4.0-9.5-7.5-13.2-	0	"

第 11 表
昭和 14 年 2 月 10 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.5-	200	40
1-2	"	156	65

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
2-3	0-0.5-	164	100
3-4	"	154	132
4-5	"	128	154
5-6	-0-0.5-1.0-	77	167
6-7	-0-0.5-1.5-	40	171
7-8	-3.2-1.0-0.5-	37	174
8-9	-1.0-1.5-0.9-	24	177
9-10	-2.5-2.0-4.0-	18	180
10-12	-1.0-1.5-1.0-2.0-	46	187
12-14	-1.0-0.5-0-2.8-	25	190
14-16	-3.0-2.0-5.0-0.2-7.0-	19	192
16-18	-3.0-2.0-3.0-	46	200
18-20	-2.5-6.2-12.0-	3	"

以上ノ 4 表 = 依リテ知ラルル如ク、コノ犬ハ約 165-207 cc/位ノ液量ヲ膀胱ニ容レ得ル事明カニシテ、又同時ニ膀胱内壓ノ上昇ハ甚ダ著明ナルヲ見得ラル。

2月 13 日正午之ニ對シ下腹神經叢乃至ハ膀胱神經叢ノ摘出手術ヲ試ム。

翌 14 日午前 9 時、未ダ自發的排尿ナク下腹部ハ著明ニ膨隆セルヲ見タルヲ以テ、「カテーテル」ヲ通ジ排尿セシメヤルニ、225 ccノ大量ナル且高度ニ血液ヲ混ゼル尿ヲ得タリ。午前 11 時「トーマス」測定ヲ行フ。9 時ヨリ 11 時迄ニモ自發的排尿無シ。11 時ニ於ケル「カテーテル」尿量ハ 97 cc ナリキ。「トーマス」測定ノ結果ヲ第 12 表ニ示ス。

第 12 表

昭和 14 年 2 月 14 日午前 11 時(手術後 1 日目)

膀胱 = 溜ツテ居タ尿量 225 + 97 = 322 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0	290	90
1-2	-0-0.5-1.0-2.1-	137	128
2-3	-0.9-1.5-4.0-	50	138
3-4	-1.0-	76	152
4-5	-1.0-1.5-	31	156
5-6	-1.7-1.0-2.5-	25	160
6-7	-1.0-1.5-1.7-	21	163
7-8	-1.0-1.5-	27	168
8-9	-1.0-1.5-1.7-	17	170

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
9-10	-2.5-1.0-1.5-	9	170
10-12	-1.0-1.5-	36	175
12-14	-1.0-1.7-3.8-2.0-2.5-	11	177
14-16	-2.5-3.5-4.7-1.0-5.5-	15	179
16-18	-1.0-2.2-5.5-3.3-	18	180
18-20	-1.0-3.0-3.5-	18	181
20-22	-4.5-4.9-2.0-1.0-	9	182
22-24	-2.5-3.3-5.5-1.0-1.5-	16	187
24-26	-2.0-1.0-4.0-2.5-5.5-	6	"
26-28	-3.5-4.0-1.0-2.5-	12	189
28-30	-3.5-2.0-3.0-1.0-	16	190
30-33	-3.7-4.5-5.8-6.7-	0	"

即チ著明ノ尿閉ヲ來セルニモ拘ラズ、コノ表ニ依レバ、サマデ健康時ト違ハザル液量シカ容レ得ザリシ事ヲ見ルベシ。コレ高度ノ血尿ガアリ、高度ノ「膀胱カタル」ガ起リタルモノト思ヘルル故、コノタメナランカト考ヘラルル事ハ既ニ記述セシトコロナリ。斯ノ如ク大量ヲ容レ得ザリシカド、膀胱内壓ノ上昇ハ健康時程著明ナラザル事ヲ見ルヲ得。

手術後2日目、即チ2月15日朝午前8時未ダ自發的排尿ナシ。「カテーテル」ニヨリ排尿セシムルニ血尿250ccヲ得タリ。午前10時半膀胱ノ「トームス」測定ヲ行フ。8時ヨリ10時半迄ノ「カテーテル尿」量35ccナリキ。コノ時ノ「トームス」測定表ヲ第13表ニ掲グ。

第 1 3 表

昭和14年2月15日午前10時半(手術後2日目)
膀胱=溜ツテ居タ尿量 250+35=285 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0	238	85
1-2	-0-0.2-0.3-0.4-	108	130
2-3	-0-0.4-0.5-0.7-	128	152
3-4	-0.5-0.6-1.2-	89	165
4-5	-0.6-0.5-1.2-	45	170
5-6	-0.5-1.2-	30	172
6-7	-0.5-1.2-	12	"
7-8	-0.5-1.2-1.9-	9	"

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
8-9	-0.5-1.2-2.1-	22	175
9-10	-0.5-3.2-1.2-	22	177
10-11	-0.5-0.4-	22	179
11-12	-0.5-1.2-	17	180
12-13	-0.5-1.4-	16	182
13-14	-0.5-1.4-	15	183
14-15	-0.5-1.2-	13	185
15-18	-0.5-0.7-2.4-5.7-3.1-	25	188
18-21	-1.2-1.7-2.2-0.5-	5	"
21-24	-0.5-1.2-1.7-2.2-	23	190
24-27	-2.2-1.7-0.5-4.2-3.2-	3	"
27-30	-1.2-1.7-2.4-2.2-	4	191

即チ191ccヲ容レ得タルノミ。但シ膀胱内壓ノ上昇ハヤハリ著明ナラズ。

手術後3日目、即チ2月16日午前8時30分、未ダ自發的排尿無シ。「カテーテル」ヲ通ジテ排尿セシムルニ、ヤハリ高度ノ血尿220ccヲ得タリ。午前11時40分「トームス」測定。8時30分ヨリ11時40分ノ間ノ澀溜尿量ハ35ccナリキ。コノ時ノ「トームス」測定表ヲ第14表ニ示ス。

第 1 4 表

昭和14年2月16日午前11時40分(手術後3日目)
膀胱=溜ツテ居タ尿量 220+35=255 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.1-0.3-	224	75
1-2	-0.3-0.5-0.7-	189	115
2-3	-0.7-3.5-	105	135
3-4	痛ミガアルラシク猛烈ニ暴レルタメ測定不能トナリ中止ス		

今回ハ實驗開始後3分ヨリ1分日ニカケテ犬ガ猛烈ニ暴レ、實驗續行ヲ不能ナラシメタリ。恐ラク「膀胱カタル」ニヨル痛ミガ強烈ナルタメナランカト思ヘル。コノタメ測定ハ中止セリ。

手術後4日目、即チ2月17日午前8時、未ダ自發的排尿ナシ。依テ「カテーテル」ヲ通ジテ排尿セシムルニ血尿215ccヲ得タリ。午前10時40分ヨリ「トームス」測定。8時ヨリ10時40分迄ノ間ノ

膀胱尿量 40 cc ナリキ。當日ノ「トーマス」測定表
ヲ第 15 表ニ示ス。

第 15 表

昭和 14 年 2 月 17 日午前 10 時 40 分(手術後 4 日目)

膀胱 = 溜ツテ居タ尿量 215 + 40 = 255 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0-1.8-0.1-	217	55
1-2	-0.1-0.2-	183	95
2-3	-0.2-0.3-	130	120
3-4	-0.3-0.4-	69	132
4-5	"	49	140
5-6	-0.3-0.4-1.3-	23	143
6-7	-0.3-0.4-	20	145
7-8	-0.3-0.4-0.8-	29	150
8-9	-0.3-1.3-1.8-	12	"
9-10	-1.8-0.8-2.0-2.3-	4	"
10-12	-0.3-1.8-	46	157
12-14	-0.3-1.3-2.8-1.0-	21	165
14-16	-3.8-1.3-4.8-2.8-	7	167
16-18	-1.3-3.8-	3	"

即チ 167 cc フ容レ得タルノミ。サレド膀胱内壓ノ上昇ハ依然トシテ健康時ニ比シ著シク劣レルヲ見ル。尙ホ當日ノ尿ハ前日ヨリモ稍々血液ヲ混ズル事少ナキモ、濁濁ハ尙ホ相當度ニ存スルヲ見タリ。

手術後 5 日目即チ 2 月 18 日午前 8 時、未ダ自發的排尿ヲ見ズ。「カテーテル尿」225 cc フ得タリ。午前 10 時半ヨリ「トーマス」測定開始。8 時ヨリ 10 時半マデノ膀胱尿量ハ 25 cc ナリキ。當日ノ「トーマス」測定表ヲ第 16 表ニ掲グ。

第 16 表

昭和 14 年 2 月 18 日午前 10 時 30 分(手術後 5 日目)

膀胱 = 溜ツテ居タ尿量 225 + 25 = 250 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0-0.3-0.5-	229	70
1-2	-0.6-0.7-0.9-	149	103
2-3	-0.8-1.0-1.5-	73	111
3-4	-0.8-1.0-1.5-2.0-	38	115

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
4-5	-0.8-2.2-	35	119
5-6	-2.0-1.5-	22	121
6-7	-0.8-1.5-1.9-	29	124
7-8	-0.8-1.5-2.0-	14	126
8-9	"	20	129
9-10	-0.8-1.5-3.0-	13	130
10-12	-2.0-2.5-0.8-2.0-	25	132
12-14	-0.8-1.5-2.0-	32	136
14-16	-0.8-2.5-2.0-	30	139
16-18	-0.8-2.5-2.7-	16	140
18-20	-2.0-2.5-2.7-0.8-	13	141
20-22	-0.8-1.5-3.0-2.5-	27	144
22-24	-0.8-1.5-3.0-2.0-	22	146
24-26	-2.0-2.8-3.2-2.5-	16	148
26-28	-0.8-2.5-3.2-	15	150
28-30	-0.8-2.5-2.7-	12	151
30-33	-0.8-2.7-2.5-2.0-	27	155
33-39	-0.8-2.7-2.5-	49	160
39-42	-2.2-0.8-1.5-2.0-	21	162
42-45	-2.0-1.5-2.5-2.9-	13	164

即チ 164 cc フ容レ得タルノミ。尿ハ未ダ血液ヲ相當度ニ混ジ居リ、「膀胱カタル」ノ未ダ治癒セザルヲ知ル。尙ホ膀胱内壓ト上昇ノ度ハ依然トシテ微弱ナリ。

手術後 6 日目即チ 2 月 19 日早朝未ダ自發的排尿ヲ見ズ。「カテーテル尿」175 cc フ得タリ。尿ニ血液ヲ混ズルノ度ハ少クナリ、サレド未ダ白色濁濁ノ度大ナリ。「トーマス」測定ハ行ハズ。

手術後 7 日目即チ 2 月 20 日早朝、午前 8 時檢スルニ、漸ヤク自發的排尿 55 cc フ認メ得タリ。尙ホコノ際「カテーテル」ニヨリ膀胱尿ヲ採取シタルガ、其ノ量ハ 118 cc ナリキ。

手術後 8 日目即チ 2 月 21 日早朝、自發的排尿 105 cc 存スルヲ見得タリ。即チ昨日頃ヨリ「トーマス」調節ノ機能ヲ幾分恢復シタルモノナルベシ。午前 11 時「膀胱トーマス」測定。コノ際ノ膀胱尿量ハ僅カ 50 cc = 過ギザリキ。コノ日ノ「トーマス」測定ノ成績ヲ第 17 表ニ掲ゲン。

第 17 表

昭和 14 年 2 月 21 日 (手術後 8 日目)

膀胱=溜ツテ居タ尿管量 50 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.3-0.5-	203	50
1-2	-0.3-2.1-1.0-1.5-	112	75
2-3	-0.5-1.8-	45	87
3-4	-2.3-1.3-0.6-	36	95
4-5	-0.6-2.3-1.3-3.3-	45	107
5-6	-2.3-2.8-0.3-	15	109
6-7	-0.3-0.6-1.3-1.8-	9	110
7-8	-1.8-2.3-0.6-4.1-	8	"
8-9	-2.3-5.2-4.2-0.6-	5	"
9-10	-0.6-2.8-	11	115
10-12	-2.3-2.7-0.6-2.1-	12	120
12-14	-0.8-1.8-0.6-	24	126
14-16	-1.6-2.8-0.6-	10	128
16-18	-0.6-2.3-	31	134
18-20	-3.5-4.1-0.6-2.0-	6	"
20-22	-2.3-0.6-1.3-	13	136
22-24	-0.6-0.8-1.5-	5	"
24-26	-2.3-0.6-	8	138
26-28	-4.3-3.3-2.8-3.8-0.6-	5	139
28-30	-3.3-6.3-7.2-	3	"

コノ日ハ如何ナル理由カ、139 cc シカ容レ得ザリキ。或ハ「膀胱カタル」ノ未ダ治癒ニ赴カザルタメカトモ考ヘラル。

コレヨリ以後「トーマス」測定表ハ紙面ノ都合上省略シ、只其ノ後 2 回測定シタル溜溜尿管ノ量ノミ記サン。

2 月 23 日 (手術後 10 日目): 5 cc

2 月 27 日 (手術後 14 日目): 20 cc

斯ノ如ク溜溜尿管ノ少キ點ヨリシテ、不完全作ラモ自發的排尿ヲナレ得ラルル事ヲ知り得。

(第 2 例) 體重 7 kg ノ雌犬。

先ヅ昭和 13 年 12 月 24 日及ビ昭和 14 年 1 月 14 日ニ測定シタル、健康時ニ於ケル「膀胱トーマス」測定表ヲ第 18 表及ビ第 19 表ニ示サン。

第 18 表

昭和 13 年 12 月 24 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.9-	64	18
1-2	-0-1.2-	46	32
2-3	-0-3.2-0.7-	21	38
3-4	-0-0.7-3.2-1.2-	29	45
4-5	-2.2-3.0-1.7-	23	50
5-6	-2.2-4.2-7.7-	11	53
6-7	-6.7-	8	55
7-8	-6.2-3.2-	2	"
8-9	-5.2-	1	"
9-10	-4.1-	13	60
10-12	-6.2-4.2-	21	65
12-14	-5.2-7.7-6.2-	19	70
14-16	-2.2-1.2-0.1-	37	80
16-18	-3.2-5.2-	37	89
18-20	-3.2-	17	92
20-22	-6.7-3.7-8.4-7.7-	3	"
22-24	-3.2-8.2-9.2-2.9-	4	93
24-26	-9.2-18.7-	0	"

第 19 表

昭和 14 年 1 月 14 日

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.2-	49	17
1-2	-0-0.2-2.0-	37	25
2-3	-0.3-1.5-	20	30
3-4	-0.3-3.5-	25	35
4-5	-0-2.5-	18	40
5-6	-0-2.7-2.5-	29	50
6-7	-2.0-4.0-	6	"
7-8	-0.2-3.0-2.5-	20	55
8-9	-2.5-0.3-	17	59
9-10	-3.0-0.3-	12	60
10-12	-2.5-2.0-0.4-3.5-	36	70
12-14	-0.4-2.3-1.5-4.0-	51	85
14-16	-0.4-2.0-3.0-	48	100
16-18	-0.4-3.5-	14	102
18-20	-5.5-4.5-0.4-4.5-	9	104
20-22	-0.5-3.5-5.8-6.5-	22	112
22-24	-5.5-6.5-0.5-3.5-8.0-	1	"
24-26	-0.5-3.0-6.5-7.5-8.0-	22	118
26-28	-6.5-7.5-4.5-16.5-	1	"

即チ 93 cc, 118 cc ノ量ヲ膀胱ニ容レ得タリ。之ニヨツテコノ犬ハ大約 100 cc 前後ノ液ヲ容ルレバ「膀胱トームス」ガ著明ニ上昇シ初メタル事ヲ知り得ラル。コノ動物ニ對シ、1月16日下腹及ビ膀胱兩神經叢ノ摘出ヲ行ヒタルガ、其ノ後ノ成績ヲ示セバ次ノ如シ。

手術後1日目即チ1月17日午前11時、「トームス」ヲ測定シタルガ、昨日手術終了ノ際ヨリコノ時迄自發的排尿ナク、「カテーテル」ニヨリ膀胱尿 165 cc ヲ得タリ。而モコノ尿ハ甚ダシク血液ヲ混ジ居タリ。コノ際ノ「トームス」測定表ハ即チ第20表ノ如シ。

第 2 0 表

昭和14年1月17日(手術後1日目)

膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 165 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0-	109	33
1-2	-0-0.2-	29	42
2-3	-0.2-0.7-	24	46
3-4	"	24	51
4-5	-0.2-1.0-	33	58
5-6	"	16	62
6-7	"	15	65
7-8	"	13	68
8-9	"	17	70
9-10	"	8	73
10-12	-0.2-1.5-	20	78
12-14	"	20	82
14-16	"	14	84
16-18	-0-2.0-1.3-	8	86
18-20	-0-0.7-2.0-3.0-	14	90
20-22	-3.3-2.0-2.5-	0	"
22-24	-2.3-1.3-2.3-	8	"
24-26	-1.0-	14	93
26-28	-1.3-1.5-	14	96
28-30	-1.0-1.5-2.5-	6	98
30-33	-1.3-1.5-	8	100
33-36	-1.5-1.0-2.5-	9	101
36-39	-2.0-2.5-1.5-	2	"

即チ著明ノ尿潴溜アルニモ拘ラズ、僅カ 101 cc ノ液ヲ膀胱ニ容レ得タルニ過ギズ。恐ラク出血性

「膀胱カタル」ノ惹起シタルタメ容レ得ル液量ガ減少スルモノナランカト考ヘラル。而モ膀胱内壓ノ上昇ハ甚ダ僅少ナル事ヲ見得ラル。

手術後2日目即チ1月18日。尙ホ自發的排尿ナシ。「カテーテル」ニ依リ排尿セシムルニ、185 cc ノ高度ノ血尿ヲ得タリ。コノ日ノ「トームス」測定表ヲ第21表ニ示ス。

第 2 1 表

昭和14年1月18日(手術後2日目)

膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 185 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0-0.5-	164	70
1-2	-2.0-1.0-0.5-	44	80
2-3	-2.0-0.5-	18	83
3-4	-3.0-0.5-2.5-	15	86
4-5	-1.5-0.5-	22	90
5-6	-2.0-1.5-0.5-	6	91
6-7	-2.0-0.5-	20	95
7-8	痛ミガアルヲシク暴レルノデ中止ス	27	100

表ニ示スガ如ク、約 100 cc 容レ得タル頃、痛ミノタメカ暴レ出シタルヲ以テ、遺憾作ヲ實驗ヲ中止セリ。サレド膀胱内壓ノ上昇ハ甚ダ些少ナル事ヲ見得ラル。

手術後3日目即チ1月19日。尙ホ自發的排尿ナク、膀胱尿 200 cc ヲ「カテーテル」ニヨリテ得タリ。ヤハリ高度ノ血尿ナリ。當日ノ「トームス」測定成績ヲ第22表ニ掲載ス。

第 2 2 表

昭和14年1月19日(手術後3日目)

膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 200 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液 量 (cc)
0-1	0-0.5-1.5-	152	65
1-2	-2.5-1.0-3.0-	66	80
2-3	-3.0-3.3-3.2-	31	89
3-4	-1.4-2.8-2.0-	21	93
4-5	-1.4-3.3-2.5-	11	95
5-6	-1.4-3.3-3.7-	11	97
6-7	-4.1-1.4-2.5-	11	99

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
7-8	-2.7-2.5-3.0-	10	101
8-9	-1.4-3.3-4.4-3.2-	4	"
9-10	-2.5-3.3-3.5-	7	103
10-12	-4.0-2.5-5.5-3.5-	4	"
12-14	-1.4-3.5-3.0-	12	105
14-16	-3.5-2.0-3.7-4.0-	10	103
16-18	-3.3-3.5-5.3-4.0-	2	"
18-20	-4.2-1.4-3.5-5.3-	7	107
20-22	-4.4-4.7-1.4-3.5-	5	"
22-24	-3.0-1.4-4.5-3.5-	8	109
24-26	-3.5-1.4-2.5-	6	"
26-28	-3.0-3.5-1.4-4.0-	5	110
28-30	-3.5-5.0-3.5-3.0-	7	111
30-33	-3.0-1.4-4.2-4.5-	8	112
33-36	-3.0-5.1-3.5-4.7-3.5-	4	"
36-39	-3.5-2.0-1.4-	11	114
39-42	-3.2-3.5-2.5-3.0-	9	115

即チ 115 cc フ容レ得タリ。

手術後 4 日目即チ 1 月 20 日。尙ホ自發的の排尿ヲ認メズ。「カテーテル」ニ依リ膀胱尿 180 cc フ得タリ。尙ホ高度ノ血尿ナリ。尙ホ「膀胱カタル」ノ進行シタルタメカ、動物が大イニ元氣ヲ失ヒ食欲殆ド無し。依テ葡萄糖液ノ皮下注射ヲ 20 cc 宛 2 回行ヒタリ。コノ日ノ「トームス」測定狀況ハ第 23 表ニ示スガ如シ。

第 2 3 表

昭和 14 年 1 月 20 日 (手術後 4 日目)

膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 180 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.2-0.5-	138	35
1-2	-0.2-1.3-	96	60
2-3	"	42	70
3-4	-1.4-2.3-3.2-	33	78
4-5	-3.1-0.5-2.0-	15	81
5-6	-1.2-2.8-4.2-3.0-	10	83
6-7	-1.3-3.3-3.6-	17	87
7-8	-3.0-2.5-5.5-	4	"

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
8-9	-3.5-2.0-3.0-4.5-	3	87
9-10	-5.3-1.4-4.2-	8	90
10-12	-1.3-4.7-3.4-	2	"
12-14	-1.4-0.8-2.2-	10	93
14-16	-1.8-0.6-	10	95
16-18	"	6	"
18-20	-3.5-4.0-2.5-2.0-	18	100
20-22	-3.0-1.4-2.4-5.0-	3	"
22-24	-4.1-2.5-	10	105
24-26	-3.6-1.5-	5	"
26-28	"	5	"
28-30	-2.0-4.1-4.3-3.5-	2	"
30-33	-3.5-1.5-2.6-	6	108
33-36	-1.6-2.8-4.8-	1	"

即チ 108 cc フ容レ得タリ。膀胱内壓ノ上昇ハ未ダ著シカラズ。

手術後 5 日目即チ 1 月 21 日早朝、排尿ノ狀況ヲ檢スベク犬小屋へ赴キタルニ既ニ犬ハ死亡シ居タリキ。尙ホ自發的の排尿ヲナシタル形跡ナシ。直チニ屍體解剖ヲ行ヒタルニ膀胱内ニ甚ダ多量ノ血尿ノ殘存セルヲ見受ケタリ。膀胱粘膜ハ一般ニ發赤シ特ニ頸部粘膜ニ於テ約 2 錢銅貨大ノ潰瘍ノ存スルヲ認メタリキ。

即チコノ動物ハ手術後約滿 4 日中ノ間全ク尿閉ノ状態ニテ其ノママ遂ニ死亡シタルモノナリ。

(第 3 例) 體重 6.5 kg ノ雌犬。

コノ動物ハ本第 2 編實驗成績第 1 節ニ於テ記シタル、即チ去ル昭和 13 年 12 月 13 日ニ骨盤神經及ビ下腹神經ヲ同時ニ切斷セル犬ニシテ、之ニ對シ更ニ下腹及ビ膀胱兩神經叢ノ摘出ヲ行ハントスルモノナリ。而シテコノ犬ハ既ニ其ノ項ニテ記シタルガ如ク健康時ニハ、先ヅ 100 cc 内外ノ液ヲ膀胱内ニ容レタルガ、念ノタメニ神經叢摘出直前ニ於ケル「トームス」測定狀況ヲ第 24 表及ビ第 25 表ニ記サン。

第 2 4 表

昭和 14 年 2 月 2 日

膀胱 = 溜ツテ居タ尿量 55 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ数	液 量 (cc)
0-1	0-0.2-	106	42
1-2	-0.2-	40	54
2-3	-0.2-0.5-	18	60
3-4	"	11	68
4-5	-0.2-1.5-	4	70
5-6	-0.2-2.0-1.0-	5	"
6-7	-1.5-2.0-	8	72
7-8	-2.5-	8	74
8-9	-3.5-2.0-	6	"
9-10	-0.5-2.3-	12	78
10-12	-2.2-1.0-	10	80
12-14	-1.0-3.3-	4	"
14-16	-0.8-1.7-1.0-	6	82
16-18	-1.0-2.3-	5	83
18-20	-3.0-2.8-	8	85
20-22	-2.5-2.3-3.2-	0	"

第 2 5 表

昭和 14 年 2 月 8 日

膀胱 = 溜ツテ居タ尿量 20 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ数	液 量 (cc)
0-1	0-0.8-	132	37
1-2	-0-1.0-	34	43
2-3	-0-0.9-1.2-	45	49
3-4	-0-0.7-	35	55
4-5	"	30	59
5-6	"	25	63
6-7	-0-1.5-2.5-	11	64
7-8	-0-2.3-	25	67
8-9	-1.5-0.5-0-	21	70
9-10	-0-1.5-1.2-	15	72
10-12	-2.5-1.5-	30	77
12-14	-1.5-1.7-2.7-3.5-	15	79
14-16	-0-1.5-1.0-2.0-	16	82
16-18	-2.3-1.5-1.0-	11	83
18-20	-1.7-2.3-2.7-1.5-	14	85
20-22	-1.2-5.5-	13	87
22-24	-4.5-1.5-	18	91
24-26	-2.5-1.7-5.0-	6	92

即チ 85 cc 及ビ 92 cc ヲ膀胱 = 容レ得タリ。而
モ豫メ骨盤神經ガ切斷サレテキルモノ故、2 回共
ニ溜溜尿夫々 55 cc 及ビ 20 cc 宛存スルヲ見ル。コ
ノ動物 = 對シ昭和 14 年 2 月 8 日下腹及ビ膀胱兩
神經叢摘出ノ手術ヲ施シタルガ、其ノ後ノ「ト
ース」測定表ヲ以下掲載セン。

手術ノ翌日即チ 2 月 9 日午前 9 時迄ニハ自發的
排尿ナシ。依テ「カテーテル」ヲ用ヒテ排尿セシム。
其ノ量 85 cc ナリ。尿ニハ血液ヲ混ジタリ。午後
1 時半「トース」測定。午前 9 時ヨリ午後 1 時半
迄ノ溜溜尿量 25 cc ニシテ、其ノ間モ自發的排尿
ヲ認メザリキ。「トース」測定ノ成績ヲ第 26 表
ニ示ス。

第 2 6 表

昭和 14 年 2 月 9 日 (手術後 1 日目)

膀胱 = 溜ツテ居タ尿量 85 + 25 = 110 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ数	液量 (cc)
0-1	0-1.5-	69	25
1-2	-0-2.5-	21	35
2-3	-0.2-1.5-	25	42
3-4	-0-0.2-2.0-1.5-	11	45
4-5	●-0.3-2.0-3.0-4.0-	22	50
5-6	-0.3-	4	"
6-7	-3.9-1.5-0.3-	7	51
7-8	-0.3-2.7-	8	52
8-9	-0.4-1.5-3.0-5.0-	18	54
9-10	-2.0-0.4-	12	56
10-12	-1.7-0.4-2.5-4.5-	15	58
12-14	-2.0-0.4-2.9-3.9-2.5-	20	62
14-16	-2.3-3.0-0.4-2.0-	12	63
16-18	-0.4-1.5-2.9-4.0-2.0-	11	65
18-20	-0.4-1.8-3.0-4.3-	15	66
20-22	-0.4-5.4-4.0-	8	67
22-24	-0.4-3.0-4.9-5.8-3.7-	9	70
24-26	-0.4-4.5-	16	74
26-28	-4.0-4.7-	2	"
28-30	-3.5-1.5-	5	76

手術ノタメ尿ニ血液ヲ混ジ、「膀胱カタル」ノ徴

候アルタメカ、著明ノ尿潴溜アリシニモ拘ラズ、
僅カ 76 cc 容レ得タルニ過ギズ。サレド膀胱内壓
ノ上昇ハ甚ダ僅少ナリ。

手術後第2日目、2月10日早朝未ダ自發的排尿
ナシ。「カテーテル」ニヨリ排尿セシムルニ、血尿
65 cc ヲ得タリ。正午「トーマス」測定ヲ行フ。早
朝ヨリ正午迄ノ潴溜尿量ハ 25 cc ナリキ。當日ノ
「トーマス」測定表ヲ第27表ニ示ス。

第27表

昭和14年2月10日(手術後2日目)
膀胱=溜ツテ居タ尿量 65+25=90 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡 ノ 數	液量 (cc)
0-1	0-0.3-1.1-	88	28
1-2	0-0.3-1.6-0-	39	35
2-3	0-0.5-1.5-	21	37
3-4	0-1.7-	13	40
4-5	0-2.1-0.9-	31	45
5-6	0-1.6-2.1-	16	47
6-7	0-2.1-1.1-	16	49
7-8	0-0.6-1.3-	16	51
8-9	2.1-3.1-0-	5	52
9-10	0-0.6-1.1-4.6-	13	55
10-12	0-2.9-2.1-1.1-	28	58
12-14	0-1.6-2.4-1.1-	22	61
14-16	2.6-1.1-0-2.1-	12	62
16-18	2.1-0-2.5-	14	61
18-20	2.1-3.0-6.1-3.1-	0	〃
20-22	1.1-1.9-0-1.3-	16	66
22-24	0.9-0-1.6-1.1-2.1-	16	68
24-26	2.1-0-1.1-3.1-	5	〃
26-28	2.1-1.1-0-	3	70
28-30	0.9-0-1.8-2.1-1.1-	6	〃

即チコノ日モ僅カ 70 cc 容レ得タルニ過ギザレ
ドモ、膀胱内壓ノ上昇ハ極ク輕微ナリ。

手術後第3日目、2月11日朝未ダ自發的排尿ナ
シ。潴溜尿ヲ「カテーテル」ニ依リ採取ス。依然ト
シテ相當度ノ血尿ニシテ其ノ量 70 cc ナリ。「ト
ーマス」測定ノ結果ハ第28表ニ示ス。

第28表

昭和14年2月11日(手術後3日目)
膀胱=溜ツテ居タ尿量 70 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡 ノ 數	液量 (cc)
0-1	0-2.0-1.5-	105	29
1-2	2.5-0-	36	34
2-3	0-0.5-1.2-	45	41
3-4	0-0.5-1.3-	33	47
4-5	3.0-0.1-	26	51
5-6	1.1-0.1-0.7-2.0-3.8-	22	55
6-7	0-1.5-3.9-1.5-2.0-	23	59
7-8	0-1.0-2.3-	22	61
8-9	2.0-1.5-	6	62
9-10	2.0-3.0-2.5-3.7-	17	65
10-12	1.7-0.1-1.5-	39	71
12-14	2.3-0.1-1.0-1.5-	29	77
14-16	1.5-0.1-	19	80
16-18	0.2-1.0-2.5-3.0-2.5-	19	81
18-20	0.3-1.0-3.8-2.0-3.5-	9	82
20-22	0.3-0.7-1.5-	10	83
22-24	1.5-2.0-2.5-3.0-	0	〃

著明ノ尿潴溜現象アルニモ拘ラズ、「膀胱カタル」
ガ關係スルタメカ、83 cc 容レ得タルニ過ギズ。
但シ内壓ノ上昇ハ尙ホ著明ナラザルヲ見ルベシ。

コノ日午後9時迄ニハ自發的排尿ヲ見ザリシガ
翌12日午前7時ニ檢シタルトコロ、手術後初メテ
自發的排尿 105 cc ヲナセルヲ見タリ。即チ手術後
滿3日間ハ全然排尿作用無ク尿閉ノ状態ニアリタ
ルモノガ、手術後4日目ニ漸ク排尿ヲ見ルニ到リ
シモノナリ。12日ノ「トーマス」測定表ヲ第29表
ニ掲グ。

第29表

昭和14年2月12日(手術後4日目)
膀胱=溜ツテ居タ尿量 30 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡 ノ 數	液量 (cc)
0-1	0-1.3-0.3-	130	35
1-2	0.8-0-	29	38
2-3	1.3-0-0.8-	36	44
3-4	0.8-0.1-	29	47

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
4-5	-0.3-0-0.8-	26	50
5-6	-0-0.8-1.6-2.3-	15	52
6-7	-0-0.8-	32	56
7-8	"	17	59
8-9	"	21	62
9-10	"	18	65
10-12	"	30	73
12-14	"	28	79
14-16	-0-0.8-1.0-1.3-	23	82
16-18	-0-0.8-1.3-	20	85
18-20	-0-0.8-1.6-2.8-2.3-	7	88
20-22	-0-2.1-2.5-1.3-	2	"
22-24	-0-0.8-2.1-	2	"

即チ 88 cc ヲ容レ得タルニ過ギズ。尙ホ自發的
排尿アリタルタメ、膀胱内ノ潴溜尿ハ僅カ 30 cc
ニ過ギザリキ。

以下、「トーマス」測定表ノ掲載ヲ省略シテ、單
ニ潴溜尿量ト容レ得タル液量トノミヲ記サン。

	潴溜尿量	容レ得タル液量
2月13日(手術後5日目)	10 cc	85 cc
2月16日(手術後8日目)	15 cc	85 cc

之ニ依リテ見ルニ、手術後滿3日間ハ完全ニ尿
閉ノ状態ニアリ、ソレ以後ハ自發的排尿ヲナセド
モ常ニ膀胱内ニ殘尿ヲ見ル。又容レ得ル液量ハ「膀
胱カタル」ノタメカ健康時ヨリモ稍々少キ量ナリ。
斯ノ如ク容レ得ル液量ハ少クトモ、「トーマス」測
定時ニ於ケル膀胱内壓ノ上昇ハ甚ダ些少ニシテ、
常ニ 3-4 cm 位ノ値ニ止マレルハ注目スベキ點ナ
リトス。

(第4例) 體重 6.5 kg ノ雌犬。

コノ犬ハ本論文第1編實驗成績ノ項ニ於テ既ニ
掲載セルモノニシテ、即チ昭和13年10月18日骨
盤神經切斷、11月9日下腹神經切斷ヲ行ヒタルモ
ノニシテ、夫等ノ成績ニ就テハ、其ノ項ニ於テ詳
述シタルトコロナリ。コノ犬ニ對シ更ニ膀胱及ビ
下腹兩神經叢ノ摘出ヲ行ヘバ如何ナル結果ヲ生ズ
ルヤ。コノ犬ハ平常約 75-50 cc ノ液ヲ膀胱内ニ

容レ得タルモノナルコトハ既ニ述ベタルトコロナ
ルガ、神經叢摘出直前ニ於ケル「トーマス」ノ測定
狀況ヲ念ノタメニ第30表及ビ第31表ニ記サン。

第 30 表

昭和13年12月1日

膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 20 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-	81	20
1-2	-1.7-1.5-0.5-	36	30
2-3	-0-	19	34
3-4	-1.0-	33	38
4-5	-2.5-1.0-0-	30	50
5-6	-1.5-5.7-	19	52
6-7	-3.0-	22	58
7-8	-2.7-1.5-	26	62
8-9	-2.9-1.5-	19	68
9-10	-3.7-2.5-	14	70
10-11	-5.9-2.5-4.5-	17	75
11-12	-5.5-2.5-	8	"
12-13	-1.5-	19	81
13-14	-1.7-1.9-6.0-	2	"
14-15	-1.5-2.0-3.8-	3	"
15-16	-3.5-2.5-	2	"
16-17	-6.0-4.5-	6	84
17-18	-4.5-5.5-	2	"
18-19	-6.5-6.0-7.0-	4	85
19-20	-7.1-	1	"
20-22	-5.5-6.9-6.4-12.5-10.0-	3	"
22-24	-3.9-6.9-		

第 31 表

昭和13年12月23日

膀胱ニ溜ツテ居タ尿量 15 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0-1	0-0.6-	59	13
1-2	-0.3-0-	23	20
2-3	-0-0.3-	24	25
3-4	-0-2.0-0.6-	19	30
4-5	-0-0.3-1.1-	14	32
5-6	-0-3.1-8.1-	23	38
6-7	-0-1.1-	15	41
7-8	"	20	47
8-9	-0-2.1-1.6-	15	50
9-10	-0-1.6-7.6-	6	51

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
10—12	—0—5.4—6.6—11.1—4.1—	8	55
12—14	—0—2.7—20.1—5.1—	20	60
14—16	—2.0—5.3—	21	66
16—18	—3.0—7.2—	12	69
18—20	—12.0—6.8—9.3—	8	72
20—22	—18.1—	2	73

以上ノ2表=示スガ如ク、85 cc 及ビ73 ccヲ容レ得タリ。而シテ骨盤神經切断後モハヤ60日以上ヲ経過シ、「トーマス」ノ回復ガ進ミタルタメカ、第31表=テハ内壓ガ20.1cm, 18.1cmノ如キ高キ値ヲ示セルガ、之ハ聊カ注目スベキトコロナルベシ。コノ犬=對シ12月24日開腹手術ヲナシ、下腹神經叢及ビ骨盤神經叢ノ摘出ヲ試ミタリ。其ノ翌日即チ12月25日ノ「トーマス」測定表ハ次ノ如シ。

第32表

昭和13年12月25日(手術後1日目)

膀胱=溜ツテ居タ尿量130 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0—1	0—0.5—1.3—	43	20
1—2	—0—1.5—	9	21
2—3	—1.5—2.0—0—	11	22
3—4	—2.5—0—	6	23
4—5	—1.5—0—	9	28
5—6	—1.9—0—	6	29
6—7	—2.0—2.7—	3	30
7—8	—2.1—0—	9	32
8—9	—1.0—1.5—	8	33
9—10	—1.7—1.5—	3	〃
10—12	—1.5—2.3—2.6—2.0—	11	34
12—14	—2.2—1.5—2.5—	10	37
14—16	—3.5—3.0—2.5—	11	40
16—18	—4.5—0—2.0—2.3—2.5—	7	41
18—20	—2.0—2.5—2.7—3.0—	4	〃
20—22	—1.0—3.5—0—	16	44
22—24	—3.0—4.5—	0	〃
24—26	—4.5—2.3—	0	〃
26—28	—0—2.5—4.0—	11	48
28—30	—2.5—3.5—	9	51
30—32	—2.5—3.5—4.2—	0	〃
32—34	—4.5—4.0—	5	52
34—36	—4.0—4.3—	0	〃

手術ノ時ヨリ後、本日ノ「トーマス」測定時迄、約一晝夜ノ間自發的排尿ナシ。「カテーテル」ニヨリ排尿セシメタルニ中等度ノ血尿130 ccヲ得タリ。「膀胱カタル」ヲ惹起シタルモノカト思ハル。其ノタメカ容レ得タル液量ハ僅カ52 cc=過ギザリキ。サレドモ膀胱内壓ノ上昇ハ甚ダ少ナク、極大値ガ3—4.5 cmニシテ、前2表=比シテ著シク減退セルヲ見得タリ。

手術後2日目、12月26日。昨日「トーマス」測定時ヨリ未ダ自發的排尿ナシ。「カテーテル」ニヨリ排尿セシムルニ95 ccノ血尿ヲ得タリ。當日ノ「トーマス」測定表ヲ第33表=示サン。

第33表

昭和13年12月26日(手術後2日目)

膀胱=溜ツテ居タ尿量25 cc

時間 (Min.)	水 壓 (cm)	泡ノ數	液量 (cc)
0—1	0—2.0—	24	13
1—2	—3.0—	4	〃
2—3	—2.0—2.5—	3	15
3—4	—2.0—	1	〃
4—5	—1.3—1.0—	0	〃
5—6	—1.5—1.0—	1	〃
6—7	—1.0—1.4—	7	17
7—8	—1.0—1.5—	4	20
8—9	—4.0—2.0—2.8—	0	〃

猛烈=暴レルタメ測定中止

「膀胱カタル」ニヨル疼痛ノタメカ猛烈=暴レテ、液ガ膀胱ノ中ニ20 cc容リタルノミニテ以後ハ容ルル能ハズ。止ムヲ得ズ本日ノ測定ハ中止トナシタリ。サレドモ猛烈=暴レテモ内壓ノ上昇ハ依然トシテ甚ダ僅少ナルヲ見得タリ。

本日ノ正午ヨリ午後6時頃迄ノ間ニ、手術後初メテノ自發的排尿約50 ccヲ得タリ。即チ手術後滿2日ノ間ハ全クノ尿閉状態ニアリシモノト云フベシ。

手術後第3日目即チ12月27日、昨晚=引續キ自發的排尿アリ。「トーマス」測定ハ「膀胱カタル」ニヨル痛ミノタメカ、甚ダ僅カノ液量シカ容レ得

ザリキ。本日以後ノ測定表ハ掲載スルヲ止メ、只「トーマス」測定時ノ膀胱内残尿量ト容レ得タル液量トノミヲ表トナシ、第34表ニ記サン。

第 3 4 表

年 月 日	手術後 日 数	膀胱 内残 尿量	容レ 得 タ ル 液 量	備 考
昭和13年12月27日	3日目	78cc	28cc	「膀胱カタル」症 状態ニ良好ニ向 ヘリ
12月28日	4日目	30cc	30cc	
12月29日	5日目	30cc	20cc	
12月31日	7日目	25cc	55cc	
昭和14年1月9日	16日目	43cc	58cc	
2月1日	38日目	40cc	60cc	
2月3日	41日目	60cc		

血尿ノ度ノ減退ニ略ボ平行シテ、膀胱ニ容レ得ル液量モ増加ノ傾向ヲ示スヲ見ル。尚ホ膀胱内壓ノ上昇ハ初メノ内ハ最高値3—5cmナリシカド、時日ト共ニ次第ニ増加シテ、1月9日ニハ8—10cm、2月1日ニハ8cmノ如キ値ヲ表ハシ、即チ膀胱排尿筋ノ「トーマス」ガ徐々ニ恢復セルモノナル事ヲ示セリ。

第4章 考 按

以上ノ實驗成績ヲ總括シ考按スル事次ノ如シ。

先づ骨盤神經及ビ下腹神經ヲ同時ニ切斷シタル例ニ於テハ、膀胱ニ容レ得ル液量ハ手術前ト大差ナク、只僅カニ増加シタルカニ認メラレ、コノ増加モ手術後第3日目ニハ既ニ元ノ状態ニ恢復セリ。又初メノ2日間ハ高度ノ尿潴溜現象ヲ生ジ、且之モ第3日目頃ヨリ消退シテ來ルヲ認メ得タリ。コノ際高度ノ尿潴溜ガ起リタルニモ拘ラズ、容レ得タル液量ガ健康時ニ於ケルト大差ノナカリシ事ハ如何ニ解釋ヲ下スベキモノナリヤ。同時ニ惹起セシ「膀胱カタル」ノタメニ、多ク容レ得ベキ場合ナリシニモ拘ラズ容レ得ザシモノナルカ、或ハ又余ガ本論文第1編ニ於テ證明シタルガ如ク犬ニ於テハ骨盤神經ヲ切斷スレバ膀胱ノ「トーマス」ハ減少シ、下腹神經ヲ切斷スレバ「トーマス」

ハ上昇スルモノ故、コノ兩者ヲ同時ニ切斷シタル時ニハコノ2ツノ脱落症狀ガ合併シテカカル成績ヲ生ジタルモノト考フベキカ、コノ1例ノ成績ノミニテハ解釋ヲ下スニハ困難ノ様ニ思ハル。サレド同時ニ起リタル滿2日間繼續セシ高度ノ尿潴溜及ビ膀胱内壓ノ著明ノ減少ハ、コノ實驗例ニ表ハレタル大イニ注目スベキ特徴ト云フベク、之ハ本論文第1編ニテ述ベタル骨盤神經切斷後ノ症狀ト全く同一ナリ。恐ラク之ハ骨盤神經切斷ニ依ル脱落症狀ニシテ、下腹神經切斷ニヨル影響ニハ非ザルモノト考ヘラル。

次ニ下腹神經叢及ビ膀胱神經叢ヲ1次的ニ摘出セル實驗例、即チ實驗成績第2節ノ第1例及ビ第2例ニ於テハ、高度ノ尿潴溜ヲ來スト同時ニ甚ダ高度ノ「膀胱カタル」ヲ生ジ著明ノ血尿ヲ混ジタリ。高度ノ「膀胱カタル」ノタメ、第2例ノ動物ハ手術後第5日目ニ遂ニ死亡セル程ナリ。コノ2例共内壓ノ上昇ハ甚ダ僅少ナルニ拘ラズ、「膀胱カタル」ノ存在スルタメカ膀胱内ニ容レ得ル液量ハ何レモ甚ダシク減少ヲ來シタリ。其ノタメニ「トーマス」ノ測定ハ實驗成績ニ示シタル如ク殆ド不可能ニ近キ状態ニアリ、成績ヲ因亂セシメタルガ、併シコノ際注目スベキハ尿潴溜現象ニシテ、第1例ニ於テハ手術後滿7日間全く尿閉ヲ見、8日目頃ヨリ漸ク不完全乍ラ自發ノ排尿ヲ營ミ得ルヲ認メ、又第2例ニ於テハ手術後滿5日目ニ死亡シタリシガ、死亡ノ際マデ遂ニ自發ノ排尿ナク、而モ屍體解剖ニ依リ膀胱内ニ甚ダ多量ノ尿ヲ潴溜セルヲ認メ得タリ。骨盤神經ノ切斷後僅カ滿2日間ノ尿閉ノミニシテ、第3日目ヨリハ自發ノ排尿ヲナシ得ル様ニナル事ヲ、余ハ本論文第1編ニ於テ論述シタルガ、彼トコノ2例トヲ比較考察スルニ其ノ尿潴溜日數ノ差ノ頗ル大ナル事ヲ知り得ルナリ。

次ニ之等2ツノ神經叢ヲ2次的ニ摘出セル實驗例、即チ第3例及ビ第4例ニ就テ考按セン。第3例ハ骨盤神經及ビ下腹神經ヲ切斷後、42日ノ經過

ノ後ニ神經叢摘出ヲ行ヒ、第4例ハ骨盤神經切斷後67日目、下腹神經切斷後46日ニ神經叢摘出ヲ行ヒタルモノナリ。夫等1次的手術ニ依リテ約2日間ノ尿閉現象ガ表ハレタニモ拘ハラズ、第2次ノ神經叢摘出手術ニ依リテ尙ホ第3例ニ於テハ滿3日間、第4例ニ於テハ滿2日間余ノ尿閉ノアル事ヲ確メ得タリシナリ。コノ手術ノ後ニモ血尿ガ起リ、「膀胱カタル」ノタメニ「トーマス」測定ノ結果ハ稍々不正確タルヲ免レズ。測定表ヲ以テ直チニ「トーマス」ヲ表ハシタルモノト斷言シ得ザルトコロナルモ、術前ヨリモ著明ノ膀胱内壓ノ降下ヲ確メ得、而モ2次ノ手術ニ依リテ再ビ2,3日間ノ尿閉ノ現ハレタルコトヲ確メ得タリ。

第1例、第2例ノ如ク1次ニ「神經叢」ヲ摘出ヲ行フ時ニハ、單ニ骨盤神經切斷後ニ發生スル滿2日間ノ尿閉現象ヨリモ更ニ長キ5—7日ノ尿閉ヲ來ス事、更ニ第3例、第4例ノ如ク1次ノ神經切斷ニヨリ2日間ノ尿閉現象アリ、2次ニ「神經叢」ヲ摘出ノ手術ヲ行フモ再ビ2—3日ノ尿閉ヲ來ス事、之等ノ事實ヨリシテコノ膀胱神經叢及ビ下腹神經叢ニ存スル神經節細胞ガ、2次ニ「膀胱トーマス」ヲ司ル中樞タルノ一役ヲ演ズルニ到ルモノナリトノ結論ヲ下サザルベカラズ。

之等ノ「神經叢」ガ新ラシク「トーマス」ヲ司ル中樞トナルモノナラン事ハ、既ニ Goltz 及ビ Ewald 兩氏ノ犬ニ就テノ實驗、即チ Hund mit verkürztem Rückenmark ニ於テモ指示サレテキルトコロニシテ、脊髄ノ下部即チ腰部及ビ薦骨部自律神經中樞ノ部ヲ除去サレタル犬ガ初メノ間ハ膀胱麻痺ヲ來スモ、暫クニシテ其ノ機能ヲ回復スル事ヲ論ジテキルトコロデアリ、又 Elliot 氏ヤ Barrington 氏等ガ色々ノ動物ヲ用ヒ骨盤神經ヤ下腹神經切斷ノ後ニ於テ「膀胱トーマス」ノ恢復ノ速カナル事ヲ觀テ、之等ノ「神經叢」ガ新ラシク中樞トナルモノナラン事ヲ述ベテ居ルトコロナルガ、之等ハ單ニ想像ニ止マルモノト云フベク、余ノ行ヒタルガ如ク直接ニ「神經叢」ヲ摘出ヲ行ヒテ膀胱麻痺ノ

状態ヲ調査シ、又之ト單ニ「神經切斷」ノ際ノ麻痺ノ状態トヲ比較シタルモノハ泰西ノ成書ニモ其ノ例ガ尠キモノノ如ク、余ハ寡聞ニシテ未ダカカル報告ハ見ザルトコロナリ。

果シテ之等ノ「神經叢」ガ2次ニ「膀胱トーマス」ヲ司ル中樞トナルモノナラバ、之等ノ「神經叢」ヲ摘出ニ依リテ永久ノナル尿潴溜現象ガ現ハレザルベカラザル筈ナリ。然ルニ實際ニハ余ノ實驗成績ニ依リテモ知ラルル如ク、永久ノナル尿潴溜現象ヲ見ル能ハザリキ。今コノ理ヲ考察センニ、手術ノ際手術場所ガ甚ダ深部ニシテ細カキ神經節ガ互ニ複雑ニ網狀ニ錯綜セルモノナル故内眼ノニ之ヲ能ク見ル能ハズ、其ノタメニ「神經叢」ヲ完全ニ摘出シ得ザル事ト、今1ツハ多數ノ「神經細胞」ガ解剖上膀胱ノ筋肉層ノ内部、即チ intramular ニ存在スルタメニ之ヲ摘出シ得ザルタメニシテ、後ニ殘サレタ「神經細胞」群ガヤハリ2次ニ「機能」ヲ營ム様ニナルモノト考フベキナリ。コノ intramular ノ「神經細胞」群ノ研究ハ、Müller, Dale 及ビ Walthard 等ノ諸氏ニヨリナサレタルトコロニシテ、彼等ニヨレバコノ「神經細胞」ハ恰カモ風ノ如キ特異ノ形態ヲ呈シ、巨大單核細胞體ヨリ數箇ノ短カキ「神經枝」狀突起ヲ出シ相連繼シテ居ルト云フ。カカル膀胱壁内ニ存在スル小「神經節」ガ膀胱自律機能ノ上ニ大ナル役割ヲ演ズルモノニシテ、恰カモ切り離タレタル腸ガ其ノ中ニ存在スル Plexus Auerbachii ニヨリテ蠕動運動ヲ續ケ得ルト同斷ト考フベク、實ニ骨盤神經及ビ下腹神經切斷後ニ於ケル「膀胱トーマス」ノ速カナル恢復ハ、ソレヨリ末梢ニ存スル下腹「神經叢」、膀胱「神經叢」及ビ膀胱壁ノ内外ニ存スル小「神經節」、之等ノ3者ニ「トーマス」調節ノ機能ガ新生サルルニヨルモノト云フヲ得ン。

故ニ吾人醫家ガ骨盤腔内ノ手術ヲ行フニ當リ以上述ベタルガ如キ自律神經系統ノ損傷ニヨリ惹起セララル此種ノ「排尿障碍」ヲ最小限度ニ防止セントメニハ、之等ノ「神經」ノ局所解剖ヲヨク熟知シ、神經纖維ノ只1本タリト雖モ損ゼザル様注意ヲ拂フ

ハ勿論、特ニ神經叢附近ノ組織ヲナルベク保存的ニ處置スル事ハ、甚ダ難事ナリト雖モ亦理想的裝作ナリト云フヲ得ベシ。

第5章 結 論

余ハ本論文第1編ニ於テ犬ヲ實驗動物トシテ、膀胱ニ分布セル2ツノ神經即チ骨盤神經及ビ下腹神經ヲ切斷シ、依リテ生ズル膀胱排尿筋ノ「トーマス」ノ變化ヲ觀察セリ。即チ骨盤神經ヲ切斷スレバ「トーマス」ハ著明ニ減少シ、下腹神經ヲ切斷スレバ「トーマス」ハ著明ニ上昇スルモ、何レモ手術後第3日目位ヨリハ略ボ元ノ値ニ恢復スル事ヲ知り、斯ノ如ク速カニ恢復スルハ末梢ニ於テ新ラシク「トーマス」調節ノ中樞ガ生ズルニヨルモノナラン事ヲ記述セリ。本第2編ニ於テハ、然ラバ其ノ中樞ハ何處ニ新生サルルモノナリヤトノ問題ニ就テ研究シタルモノニシテ、以下其ノ成績ヲ總括的ニ述ベニ、

1) 骨盤神經及ビ下腹神經ヲ同時ニ切斷スル時ニハ、膀胱ニ容レ得ル液量ハ術前ヨリ多少増加スルカニ見ユ。但シコノ實驗例ハ輕度ノ「膀胱カタル」ヲ合併セル故、之ヲ以テ直チニ正鵠ナル成績トハ云ヒ得ザルモ、膀胱内壓ノ上昇ハ極度ニ減少シ、又初メノ2日間ハ高度ノ尿潴溜ヲ起シ、且之ガ第3日目頃ヨリ次第ニ退消スルヲ認メ得タリ。

2) 1次ニ下腹神經叢及ビ膀胱神經叢ヲ摘出スル時ニハ、高度ノ血尿ヲ伴フ「膀胱カタル」ヲ起シタルタメカ、容レ得ル液量ハ甚ダシク減少セリ。但シ高度ノ尿閉ヲ來スヲ認メ、第1例ニ於テハ7日間繼續シ以後漸ク自發的排尿ヲナシ得、又第2例ニ於テハ滿4日半ノ間繼續シテ死亡セリ。即チ單ニ骨盤神經ヲ切斷シタル時ヨリモ長期間ニ亙リ尿閉ヲ來スヲ確メ得タリ。

3) 1次ニ骨盤神經及ビ下腹神經ヲ切斷セル犬ニ對シ、2次ニ之等2ツノ神經叢ヲ摘出ヲ行フ時ニハ、1次ノ神經切斷ニヨリ約2日間ノ尿閉アリタルモノガ、2次ノ神經叢摘出ニヨリテ又再ビ2—3日ノ尿閉ヲ來スヲ認メタリ。コノ際モ「膀胱カタル」ノ出現アリタルタメ、「トーマス」測定ノ結果ハ容レ得ル液量ガ著シク減少セリ。

以上ノ實驗成績ヨリシテ余ハ新生サルル「膀胱トーマス」調節ノ中樞ニハ、之等下腹及ビ膀胱兩神經叢ガ其ノ一役ヲ演ズルモノナリト斷ジタリ。尙ホ之等神經叢摘出後ニ於テ永久ナル尿閉ノ來サザル所以ハ、膀胱ノ壁内(intramular)ニ存スル小神經節ガ手術ニ際シ摘出シ得ナイタメニ、後ニ殘サレタル神經細胞群ガヤハリ2次ニ其ノ機能ヲ營ムモノト考フベク、即チ膀胱排尿筋ノ「トーマス」ヲ司ル2種ノ神經、骨盤神經及ビ下腹神經ヲ切斷スルモ、「トーマス」ガ速カニ恢復スル理由ハ、膀胱神經叢、下腹神經叢及ビ膀胱壁ニ存スル小神經節細胞ガ3者一體トナリ2次ニ「膀胱トーマス」ヲ司ル神經中樞トナルニヨルモノナリ。

本論文ノ要旨ハ、去ル昭和14年2月、岡山醫學會第50回總會ノ席上及ビ昭和14年4月、熊本醫科大學ニ於テ開催サレタル第18回大日本生理學會ノ席上ニ於テ發表講演ヲナセリ。

稿ヲ終ルニ臨ミ、終始御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜ハリシ、恩師生沼教授ニ蓋謝シ、併セテ實驗ニ際シ常ニ御親切ナル御援助ヲ賜ハリシ小阪講師ニ深謝ノ意ヲ表ス。

文 獻

1) 尼崎、近畿婦人科學會雜誌、第18卷、前編、2008頁。 2) 尼崎、近畿婦人科學會雜誌、第18卷、

後編、753頁。 3) 尼崎、近畿婦人科學會雜誌、第19卷、81頁。 4) A. Bethe, G. v. Bergmann, G.

- Emdden* u. *A. Elliger*, Handbuch der normalen und pathologischen Physiologie. 5) *H. Dennig*, Die Innervation der Harnblase. 6) *H. Dennig*, Zeitschr. f. Biol., Bd. 80, S. 237, 1924. 7) *Ellenberger* u. *Baum*, Anatomie des Hundes. 8) *T. R. Elliot*, Journ. of Physiol., Vol. 33, 29 P., 1906. 9) *T. R. Elliot*, Journ. of Physiol., Vol. 35, P. 367, 1907. 10) *Fr. Goltz* u. *J. R. Ewald*, Pflüger's Archiv, Bd. 63, S. 362, 1896. 11) *H. F. O. Haberland*, Die operative Technik des Tierexperimenta. 12) 本田, 倉敷中央病院年報, 第12年, 第2號, 1頁. 13) *H. Kreutzmann*, Die Medizinische Welt, Nr. 47, S. 1675, 1938. 14) 加藤, 生理學. 15) *J. N. Langley* & *H. K. Anderson*, Journ. of Physiol., Vol. 16, P. 460, 1894. 16) *J. N. Langley* & *H. K. Anderson*, Journ. of Physiol., Vol. 17, P. 177, 1894. 17) *J. N. Langley* & *H. K. Anderson*, Journ. of Physiol., Vol. 18, P. 67, 1895. 18) *J. N. Langley* & *H. K. Anderson*, Journ. of Physiol., Vol. 19, P. 71, 1895. 19) *J. N. Langley* & *H. K. Anderson*, Journ. of Physiol., Vol. 20, P. 372, 1896. 20) *G. Morien* et *J. B. Guiran*, Société de Biologie, No. 29, 1938. 21) *Newton*, Ewans' Recent Advances in Physiology. 22) *F. Nawrocki* u. *B. Scabitschewsky*, Pflüger's Archiv, Bd. 48, S. 335, 1890. 23) *F. Nawrocki* u. *B. Scabitschewsky*, Pflüger's Archiv, Bd. 49, S. 141, 1891. 24) *H. Rein*, Physiologie des Menschen. 25) *E. Schälz*, Das Autonome Nervensystem. 26) *C. S. Scherrington*, Journ. of Physiol., Vol. 13, 8 P., 1892. 27) *M. v. Zeissel*, Pflüger's Archiv, Bd. 53, S. 560, 1893. 28) *M. v. Zeissel*, Pflüger's Archiv, Bd. 55, S. 569, 1894. 29) *M. v. Zeissel*, Pflüger's Archiv, Bd. 89, S. 605, 1902.

Aus dem Physiologischen Institut der Medizinischen Fakultät Okayama
(Vorstand: Prof. Dr. S. Oinuma).

Die Blaseninnervation und ihr Tonus.

(II. Mitteilung.)

Verhalten des Blasen-tonus nach der Exstirpation der Plexi hypogastrici und Plexi vesicales.

Von

Naoyasu Sato.

Eingegangen am 29. Juli 1940.

In der I. Mitteilung dieser Veröffentlichung hat der Verf. das Resultat seiner Untersuchungen über den Tonus der Harnblase nach der Durchschneidung der sämtlichen Nerven, welche die Blase innervieren, berichtet. Von obigem Versuche wurde ihm bekannt geworden, dass der verlorengegangene Tonus der Blase durch die Durchtrennung vom Rückenmark schon am dritten Tage zum normalen Wert zurückkehrt. Um die Stelle des vertretenen Zentrums zu bestimmen, wurde dieser Versuch gemacht. Die Resultate waren folgendermassen:

1) Nach der Durchschneidung der Nn. pelvici sowie auch Nn. hypogastrici vermehrte sich die einführbare Flüssigkeitsmenge der Blase als vor der Operation. Unvermeidbarer Blasenkatarrh beeinträchtigte das Resultat mehr oder weniger. Der Binnendruck der Blase verringerte sich stark, während der Harn viel darin retentierte. Dieser Zustand kehrte sich schon am dritten Tage zum Norm:

2) Wenn man die Plexi hypogastrici und die Plexi vesicales extirpierte, so trat ausnahmslos Blasenkatarrh mit hochgradiger Hämaturie ein. Infolgedessen konnte man nur wenige Flüssigkeitsmenge in die Blase hineinführen. Aber der Binnendruck der Blase verminderte sich so stark, dass der Harn drin retentierte; z. B. in einem Fall dauerte die Harnretention eine Woche, danach kehrte die selbstständige Harnentleerung allmählich wieder. Im anderen Fall kehrte die selbstständige Harnentleerung nicht wieder bis zum Tode, welcher am fünften Tag nach der Operation auftrat.

3) Wenn man am Hunde, dessen Nn. pelvici und Nn. hypogastrici vorher durchgeschnitten gewesen waren, die Plexi hypogastrici und die Plexi vesicales beiderseits extirpierte, so trat wieder eine zwei bis drei Tage lang andauernde Harnretention ein. Der Binnendruck der Blase senkte sich stark, doch die einführbare Flüssigkeitsmenge verminderte sich auch stark (dank dem Blasenkatarrh?).

Aus den obigen Resultaten kam der Verf. zum Schluss, dass die Plexi hypogastrici und Plexi vesicales als neues Nervenzentrum zur Herrschaft des Blasentonus kommt. Warum blieb die Harnretention nach der Exstirpation dieser Nervengeflechte nicht andauernd? Man kann wohl vermuten, dass bei der Operation etwaige Nervenganglien an der Harnblasenwand intramular nicht ausgerottet liegen blieben. Diese zurückgebliebenen Nervenzellen übernehmen dann die Funktion des Zentrums und üben jetzt die Rolle des Zentrums aus.

So kann man annehmen, dass Plexus hypogastricus und Plexus vesicalis einschliesslich der an der Blasenwand intramular vorhandenen Nervenzellen für die Beherrschung des Tonus zusammenwirken; so sie die Stelle des Zentrums vertreten. (Autoreferat)